

タックルにおける head down が肩関節および 肩甲骨の運動に及ぼす影響

○伊藤 渉^(PT, AT) (いとうわたる)^{1), 2)}, 川村 拓実^(その他) 1), 江玉 睦明^(PT, AT) 1), 2),
大森 豪^(MD) 2)

¹⁾ 新潟医療福祉大学 理学療法学科

²⁾ 新潟医療福祉大学 アスリートサポート研究センター

【目的】

肩関節脱臼はラグビーではタックルで受傷することが多く、タックル時には head down といった不良姿勢をとっていることが報告されている。受傷メカニズムとして Head down によって肩関節への外力が増大することが考えられるが、head down がどのように肩関節の運動に影響するかは不明である。本研究では、三次元動作解析を用いてタックルにおける head down 姿勢が肩関節および肩甲骨の運動に及ぼす影響について検討することを目的とした。

【対象と方法】

ラグビー経験者 10 名 (年齢 20.1 ± 0.5 歳, 身長 170.0 ± 6.0 cm, 体重 68.7 ± 10.1 kg) を対象とした。三次元動作解析装置を用いてタックル姿勢の測定をおこなった。頭部が上がっている head up と頭部が下がっている head down の 2 姿勢について 3 回ずつ測定をおこなった。肩関節外旋角度および肩甲骨後傾角度について head up と head down の差の比較を対応ある t 検定を用い統計学的解析をおこなった。有意水準は 5% とした。

【結果】

肩関節外旋角度には有意な差は認められなかった。肩甲骨後傾角度は head up に比べ head down が有意に大きかった ($p < 0.05$)。

【考察】

タックル時の肩関節外旋角度の増大は肩関節前方脱臼の危険肢位と考えられている。本研究では head down による肩関節外旋角度の増大は認められなかったが、肩甲骨後傾角度が増大していることから肩関節外旋角度の増大を肩甲骨後傾によって代償していることが示唆された。